障がい者スポーツのクラス分けにおける評価とモチベーション
～パラ卓球競技に着目して～

1230414　上田大雅
指導教員　前田和範

研究背景

「障害を抱えている＝パラリンピックに出場できる」というわけではない。各競技に定められているクラス分け最小基準を満たさなければ、参加資格が認められない。著者自身も障害を抱えているが、パラリンピックへの出場が認められていない一人である。本研究ではパラ卓球に着目し、障がい者スポーツのクラス分けにおける評価とモチベーションについて研究を進めることにした。

研究目的

本研究の目的は、パラ卓球競技におけるクラス分けの基準の適切性を検討するとともに、基準に満たない競技者のモチベーションやクラス分けの課題を明らかにすることである。

研究方法

書籍やウェブ資料などからの内容分析、競技者へのインタビューを行った。インタビュー対象者は、パラ卓球クラス S に所属する競技者 3 名であった。

分析結果

インタビューを行った全ての競技者がクラス分けに関して好意的に評価していないことが明らかになった。モチベーションに関しては、インタビュー対象のすべての競技者がスポーツクラス不適格（Not Eligible, 以下「NE」）に一時的なショックを受け、一時的であってもモチベーションの低下を招いていた。また、NE 判定後は、NE 判定以前より障がい者スポーツ（パラ卓球）への参加が減少していることも明らかになった。

考察・結論

クラス分けにおける曖昧な点（グレーゾーン）の存在や、障がい者スポーツ・クラス分けへの理解の無さが、クラス分けにおける好意的な評価を得られない要因であると考えられる。モチベーションに関しては、パラリンピック出場の可能性が消失したことから一時的なモチベーションの低下がみられるも、競技者の障害の軽さ（ハンディを感じるが、健常者の中でも卓球ができる）が長期的なモチベーション低下を抑制した。しかし、NE 判定を受けた多くの競技者は、パラ卓球から退いているというデータが得られた。障害を抱えている競技者がパラ卓球から離れることを防ぐために、クラス S の競技者のモチベーションが上がるようなシステムの構築が求められる。